

2025年2月16日  
宮崎中部教会創立百周年記念礼拝説教

「祝福を祈り続けて」

詩編109：21～31、Iペトロ3：8～9

本日は、宮崎中部教会の創立記念、しかも創立百周年の記念の礼拝に招かれまして、敬愛いたします宮崎中部教会の皆さんとご一緒に礼拝をささげますことを大変嬉しく、また光栄に思います。長年、牧師を続けておりまして、なかなか百周年の礼拝は経験することがないものです。わたしは現在の錦ヶ丘教会で今から18年前に百周年の礼拝をまもりました。ですから今回二度目になりますが、牧師人生の中で二度もこういう歴史の節目に立ち会えるのは本当に光栄なことです。乾先生は、在任中、百周年の話をなさっておられましたから、ご自身も楽しみにされておられたでしょうけれども、百周年を迎える前に転任なさいました。小堀先生もやがて一ヶ月後には着任なさいますが、この百周年には立ち会えません。それは皆さんも同じことでして、この宮崎中部教会百年の歴史という視点で考えれば、この百年のタイミングで教会員であることも、それこそ選ばれた方々なのです。貴重な歴史の節目の証人であることをまずは素直に喜びましょう。

節目と申しますと、わたしは今年牧会30年です。30年前1995年、1月に阪神淡路大震災、そして3月に地下鉄サリン事件がありました。社会全体が非常に重苦しい空気に包まれる中、わたしは都城城南教会に遣わされました。わたしの手元に宮崎中部教会70周年記念誌があります。これは1995年2月に発行されたもので当時の牧師大井上稔先生が、着任してすぐのわたしにくださったものです。Kさんの絵が表紙になっている。Uさんご夫妻、Iさんご夫妻、Wさんご夫妻、Sさん。ここには懐かしい方々のお名前を見受けられます。大井上稔先生は、新卒で何もわからないわたしを優しくご指導してくださいました。最初の葬儀は大井上先生が手伝ってくださいました。大井上先生が隠退されてからは、南澤望牧師、浅場知毅牧師、理恵牧師、乾元美牧師、そして四月からは小堀康彦牧師を迎えます。同じ連合長老会の交わりの中でこのような歴代の牧師たちとも親しくさせていただいております。皆さんもまた今日の日を覚えておられるでしょう。その思いを受け止めながら、今日の礼拝を献げたいと思います。

今日は、この創立記念の礼拝において、ぜひご一緒に詩編第109編を味わいたいと思います。この御言葉を持って今日の創立百周年の記念のときとしたいと思います。28節に「彼らは呪いますが、あなたは祝福してくださいます」とあります。呪いと祝福という対極にある事柄がここにあります。実はこの詩編第109編は呪いから祝福へ大きな転換を遂げる詩編であります。でも神さまの救いは、そのような天と地をひっくり返すような変革をもたらすものです。これまで呪いの言葉を語ってきた者が、祝福の言葉を語るようになる。祝福を祈るようになる。呪い

から祝福へ。そういう大変革がここに 있습니다。もちろんわたしたちもイエスさまによってそのように呪いから祝福へ移されたものです。

関係する保育園があり、先生方との学びもしますが、先日そこで子どもたちの言葉が激しいという話題になりました。暴力的な言葉が日常的に出てくる。それは子どもたちを取り囲む環境、家族や友達の影響やゲームなどの影響、あらゆる要因があるでしょう。でも考えてみると、それは決して特異なことではありません。世の中は、誰かを攻撃する言葉で満ちています。いじめやパワハラの問題は後を絶ちません。SNSには誹謗中傷の言葉が溢れています。そういう言葉に傷つく人たちがたくさんいます。それこそ呪いの言葉であふれているような現実がわたしたちの身の回りにはあるのです。

けれども、そのような中であって、教会はそれと正反対の道を行く。礼拝の最後に祝福があります。世の中がどんなに呪いの言葉で溢れていても、教会は祝福を祈り続けてきました。宮崎中部教会も百年の間、祝福を祈り続けてきました。何よりわたしたちは神さまの祝福を携えてここから出て行くのです。その祝福の源はどこにあるのでしょうか。

今日は21節以下から読みましたから、あまり呪いの印象を感じなかったと思いますが、実はその前のところは呪いの言葉で満ちています。

「彼は呪うことを好んだのだから、呪いは彼自身に返るように。

祝福することを望まなかったのだから、祝福は彼を遠ざかるように。

呪いを衣として身にまとうがよい。呪いが水のように彼のほらわたに

油のように彼の骨に染み通るように。呪いが彼のまとう衣となり、

常に締める帯となるように。」(109:17~19)

具体的には6節から20節までが呪いの言葉となっています。新共同訳聖書を見ますと8節以下は段落を下げておりますが、この部分はいわゆる呪いの儀式において用いられた言葉であると考えられて、この部分を他と区別しております。区別するのは、これが詩人の言葉ではなく引用であるという解釈が働くからです。

どうしてでしょう。やはり聖書の中にこういう呪いの言葉があることにつまずきを覚える人が多いのです。ですからこの呪いの言葉をなるべく詩人から遠ざけようとしてします。激しい言葉だけにそういう心理が働くのは当然でしょう。実際に、この詩編はかなり危険が伴うもので、これが呪いに使われたこともあったようです。カルヴァンは詩編注解の中でこう述べています。「誰かが、その破滅を願い求めて止まないような宿敵を持つとき、来る日も来る日もこの詩編

を唱えさせるというのが慣わしになっている」と。また18世紀のある記録では、誰かを呪うためにこの詩編を1年と9日の間、朝から晩まで唱える。だがこの呪いを一日でも止めるなら、呪いは敵にではなく本人に振りかかると。そういう魔術的なものに変質していく。これは本来の詩編の意味からも大きく逸脱しています。ではわたしたちはこの詩編をどのように読むべきなのでしょう。

この詩編の表題には「ダビデの詩」とあります。少しダビデの身になってこの詩編を考えてみるとその呪いの意味がよく分かります。ダビデはサウルの妬みを買ひ、一方的に敵意を持たれ、いわれもない攻撃を受けました。理不尽としか言いようがない。そのダビデの心境が、この詩編の冒頭の部分によく表れております。

「神に逆らう者の口が、欺いて語る口が、わたしに向かって開き、偽りを言う舌がわたしに語りかけます。憎しみの言葉はわたしを取り囲み、理由もなく戦いを挑んできます。愛しても敵意を返し、わたしが祈りをささげても、その善意に対して悪意を返します。愛しても、憎みます。」

(2～5節)

憎しみの言葉が取り囲む。こちらは敵意はなく、むしろ愛しているのに、敵意を返される。善意に対して悪意を返される。そういう一方的な仕打ちを受けたならば、皆さんはどうでしょうか。もし自分が同じ立場であったならば、わたしたちも呪いの言葉を語るかもしれない。

ここを読みながら、今起きている戦争のことを思いました。命を奪われ、国を奪われ、命の尊厳が踏みにじられていく現実があります。そしてそこに芽生える怒りや憎しみは計り知れないものがあります。大切な家族を奪われた悲しみや怒りが、このような呪いの言葉を語らせるのは決して難しいことではないと思う。今日は百周年の礼拝ですが、当然、宮崎中部教会も戦争を通してきました。今年戦後80年の節目の年です。教会もまた試練の中にありました。敵国の宗教と揶揄され、差別と偏見の中で、悲しい思いをされた方々も多かったのではないかと。

ですから、あえてこの呪いの言葉を詩人と分ける必要はないのです。むしろわたしたちの内面を深く描き出していると捉えることができるのではないのでしょうか。憎しみの果てに呪いの言葉を口にする。それはありのままのわたしたちです。聖書はそこを決して美化していません。ブルグマンというアメリカの旧約聖書の学者は「詩編は見せかけの優しさを突き破る自己発見の行為である」と述べています。わたしたちには見せかけの優しさがあります。内心は怒りや憎しみに満ちていても、表面は穏やかに振る舞う。けれども詩編はそういう見せかけを打ち破る。すべてをさらけ出すのです。でもそれが御言葉の役割でしょう。ヘブライ人の手紙に「神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されている」

(4：13)とあります。

御言葉によってさらけ出されるもの、それは何でしょうか。罪です。その本当の闇の部分、隠された罪がさらけ出された時に、わたしたちは誰かを呪うこと、あの人がいなくなればいいという考えから決して自由ではないということに気づかされると思うのです。

そしてその時に、今日読みました21節以下の部分がより福音としてわたしたちの心に響いてまいります。詩人は、このような激しい呪いの言葉を口にした後、21節以下では、一転して神さまに救いを求めるようになります。「主よ、わたしの神よ。御名のために、わたしに計らい、恵み深く、慈しみによって、わたしを助けてください。わたしは貧しく乏しいのです。胸の奥で心は貫かれています。移ろい行く影のようにわたしは去ります。いなごのように払い落とされます。断食して膝は弱くなり、からだは脂肪を失い、衰えて行きます。わたしは人間の恥。彼らはわたしを見て頭を振ります。わたしの神、主よ、わたしを助けてください。慈しみによってお救いください」（21～26節）

まるでふと我に返っているかのようです。正気を取り戻し、このような呪いの言葉を口にしたことを恥じ、自分の貧しさを告白します。「わたしは人間の恥」（25節）とまで言います。自己嫌悪です。それは神さまの御前にその弱さ、貧しさを認め、告白するということです。

先ほど紹介したブルグemanは、「詩人の激しい怒りと敵意の全ては、神の知恵と神の配慮に明け渡される」と言います。まずは自分の中にある怒りと敵意が吐露され、それゆえに自らの貧しさに打ちのめされる。そしてそのすべてを神さまに委ね、明け渡すことで、詩人はこの怒りから解放されていくというのです。その解放こそ最後の部分に込められている言葉です。

「わたしはこの口を持って主に尽きぬ感謝をささげ、多くの人の中で主を賛美します。主は乏しい人の右に立ち、死に定める裁きから救ってくださいます」（30～31節）

ここに詩人の決定的な変化があります。さっきまで呪いの言葉を口にしてきた者が、神さまへの感謝、賛美を歌う者とされる。呪いから祝福へ、呪いから賛美への大転換が起こる。神さまに明け渡すことで、一人の人間がそこまで変わることができるのです。この詩編が伝えようとしている福音はここにあります。そしてこの呪いから祝福への飛躍こそ、十字架で死んで、三日目によみがえられたキリストの救いをそこに豊かに指し示すものなのです。

31節「主は乏しい人の右に立ち、死に定める裁きから救ってくださいます」この乏しい人であるわたしの右に立たれたのはイエス・キリストに他なりません。憎しみに燃え、呪いの言葉を口にする貧しいわたしの傍にイエスさまは来てくださいました。そのわたしの罪を担い十字架におかかりになられ、死に定める裁きをご自身が引き受けてくださった。わたしたちの怒りも憎

しみもすべてイエスさまが引き受けてくださったのです。パウロは書簡の中で「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。『木にかけられた者は皆呪われている』と書いているからです。それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人に及ぶためである」（ガラテヤ3：13～14）と書いています。

もし、わたしたちが憎しみや怒りから解き放たれるとすれば、このイエスさまの救いによる以外に道はありません。そしてこのイエスさまによって憎しみから解き放たれた者は、もはや見せかけではなく、心から祝福を祈る者へと変えられていきます。「悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです」（Iペトロ3：9）呪いではなく、祝福を祈る者としてわたしたちは新しく歩み出すのです。

宮崎中部教会は100年、この神さまの救いによって祝福を祈り続けてきました。70周年記念誌ですが、最後に年表があります。先ほど、戦争のことに触れました。この1941年以降の数年を見ると非常に不思議なことがあります。戦争という大きな試練の中で、受洗者が多く与えられている。5年間で26名。殺伐とした時代にあって、宮崎中部教会が祝福を祈っていた証しです。これからもいよいよ祝福を祈り続ける群れとして新たな歴史を歩み始めましょう。お祈りをいたします。

天の父よ。わたしたちは怒りや憎しみに簡単に支配されてしまいます。人を呪う言葉さえ口に上ります。しかしそのような乏しいわたしたちの右にイエスさまが来られ、死に定める裁きからわたしたちを救い出してくださいるために、十字架におかかりになられました。そしてよみがえりによって、呪いではなく、祝福を祈る者へと新しく造りかえてくださいました。どうぞこの大いなる救いに招かれ、生かされている幸いを覚えさせてください。宮崎中部教会がこれからも祝福を祈り続ける教会としてこの地に立ち続けて行くことができますように強めてください。主の御名によって祈ります。アーメン。